

小西甚一の「文鏡秘府論考」に対する授賞審査要旨

本研究は空海の詩論書、文鏡秘府論を研究したもので、研究篇二冊攷文篇一冊より成つて居る。本書はその研究篇第一冊であり、序説第一章成立考、第二章本文批判、第三章四声および反切考よりなつて居る。序説に於ては文鏡秘府論なる題名ならびに撰者空海について概説し、また秘府論の伝来ならびに研究史についてのべて居る。

第一章成立考に於ては秘府論の成立年代、撰述の事情を考察し、更に秘府論を要約した文筆眼心抄との關係を論じ、更に秘府論引用の原典を考察して居るが、就中引用の原典については弘仁期の現在典籍、直接引用の原典、間接引用の原典に分ち従来の研究にもとずき、更に精細に調査を加え新たに闡明した点が尠くない。

第二章本文批判については現存の諸本を調査し、本文系譜の建設を試み、初稿本と再治本との關係を明らかにして再治本をも比較的純粹なる再治本系統と比較的不純なる再治本系統とに分ち、草稿本への還元と本文の整理とを行つて居る。著者の研究によれば自筆草稿本の上に修正を加えていたために転写に際し自ら混同を誘導して複雑な本文系統をなしたとして居る。この点は攷文篇と相俟つて書誌學的研究としてすぐれて居る点である。なおその他に本文以外の諸事実として古写本に存する注記や訓点について調査を行つて居る。

第三章は秘府論の内容の考察の第一として四声および反切の考察を行つて居る。即ち秘府論卷一の考察である。はじめに調四声譜についてその原拠を明らかにし、ついで紐の成立、韻紐図の解釈を行い、また反音図とその機能を扱つて居る。紐とは語頭子音および韻形を等しくしながらそれぞれ声調を異にする四字のひとかたまりであるとして居

る。つぎに反切の成立と反切論の展開を考察し、また五十音図と反切との関係をとぎ、更に秘府論の四声論の原拠である四声指版の声調論を考察するとともに、四声の成立と四声論の展開とを考察し、終りに四声における軽重と清濁とについて論じて居る。特に反切論の展開では韻紐図から發達した九弄図について精細な考察を行つて居り、また我國の反切論の展開として安然、明覺その他の悉曇學者の反切研究を歴史的に扱つて開拓する所が多い。四声論の展開についても我國に於ける声調論の展開をば研究書を広く集めて精密に考究して居る。

本研究を通観するにその書誌学的研究に於ても内容の研究に於ても博く資料を蒐集し整理した上で体系を整え精緻な考察を行つて居り、従来の研究を集大成した上で、新たに開拓した点が多い。時には余りに枝葉にわたり秘府論研究の範圍を越えたと思われる点もないではないが、それだけ著者の考察は考究すべき対象の基礎を明かにした上で核心にせまらんとし、飽くまでも徹底せざればやまない態度を見ることが出来る。

本書の第二、三冊は未だ刊行の運びに至つていないけれども、すでに刊行された第一冊だけでも文鏡秘府論の研究として画期的な成果と認められる。